

下水道技術をソフトパワーに



独立法人 国立環境研究所 理事長

大垣 眞一郎
Ohgaki Shinichiro

地球環境への対応も新政権になってから、新しい様相になってきた。また2, 3年前から、水全般の政策を統合して議論する機運が増えてきている。国の各省の政策展開に加えて、各水関連事業体の国際的な動き、民間企業の積極的な共同事業的国際展開構想、また、科学技術関連予算も水への投資が増えている。さまざまな周波数の波が重なり合っていて広がっている感がある。下水道も伝統的な重要な役割に加え、新しい役割に向けさらに展開が期待されている。特に国際展開は大きな課題である。

かつて、塩野七生氏が、「ローマ人の物語」第10巻を著し（2001年、新潮社）、ローマ人は当時、インフラストラクチャー（街道、水道、橋、医療制度など）を、「人間が人間らしく生活を送るためには、必要な大事業」と表現していたと紹介した。土木や上下水道の関係者は、よくこの表現を引用してきて久しい。私自身もたびたび引用している。上下水道などの事業の本質を表していて、事業を説明するのに最も短い優れた解説になっているではないか。

その塩野氏が、最近の「文藝春秋」（2009年9月号92-93頁）に、「ソフトパワーについて」という随筆を寄せていた。部分を引用しながら、その論点を紹介したい。マンガやアニメが日本の誇るソフトパワーとすることらしいが、その種のパワーだけでは不十分と述べたあと、『…、面白がられるのと、実際に役立つ

ので敬意を感じずるのとでは、パワーの継続という面でおおいなるちがいがあある…』とし、『海外派兵というカードを使えない日本の現状では』、役に立つハードなものを、ソフトに使う考え方が重要と述べている。『…古代ローマのインフラを書いていたときだった。ローマ帝国の二大インフラとなれば、二千年後の今なお有名な街道と水道につくる。書きながら、ローマ人はこれらをソフト・パワーとして活用したのだ、と気づいたのだった。』と続けている。ローマ帝国は征服した地域に街道と水道を敷設した。『また、上下水道の整備も、大変な効果があった。新鮮な水が豊富に使えるようになれば、飲用にかぎらず、疾病発生の防止にもなるのだ。眼の前で子供が次々と死んでいくのを見ることもなくなった親の耳には、…、独立か死かと叫ぶ抗戦派のスローガンも遠吠えでしかなくなったろう。』。塩野氏は、その随筆の中で続けて、今年のサミットが開催されたイタリアのラクイラが震災の被災地であったことから、日本の耐震技術の粋を集めた体育館の建設などが、耐震技術が普及していない他の経済的な開発途上の国々へのショーウインドーにもなる。役に立つ技術によって、世界への有効な貢献になるとして、『…やはり日本は、技術の向上だけでなく、その技術を外交にも活用することも真剣に考えてはどうだろう。』と結んでいる。

日本の下水道技術とシステムは世界第一級のもので

ある。膜や薬剤、パイプなどの素材から、処理技術システム、計装・制御、管路システム、汚泥処理処分技術、運営・経営などを言うまでもなく、川上から川下まで全体を通して優れたシステムを作り上げ有機的に運用している。このようなことを可能にしている国は数少ない。しかし、特に技術関係者は、個別技術の開発と向上には熱心であるが、関連分野への応用と展開は、それぞれの関連分野の専門家に任せればよいと言うような発想が多いのではないであろうか。

現在、世界といわなくても、日本の中でも、温暖化ガス削減政策、省エネルギー対策、人口減高齢化対策、地震・洪水など災害対策、廃棄物循環対策、生物の生態系保全策、健康な安心できる社会作りなどこれからの社会を構想し、解決すべき多くの課題がある。遠近さまざまであろうが、すべて下水道と関連している。上に引用した外交に関するソフトパワーへの展開は、国内の事業に携わる方々には最も遠い応用に映るかもしれない。しかし、総合的な視野の中で、技術を位置づける考察をする時に、もっとも優れた例題となる。下水道の技術者は関連分野も積極的に取り入れるべきである。

下水道関連のさまざまな国際展開の具体策が活発に動き始めている。「技術」の有用性を改めて大きな視野の中で見つめ直す良い時代である。